ぎふ どうぼう

No. 96

2008. 6

780年もの間、絶やすことなく
守り続けている千葉家の「火」
（郡上市明宝）

人と灯と

灯が闇を照らす
やさしく　深く
人は灯とともに生きてきた

灯が闇を照らす
外を照らす
まわりが明るくみえてくる
他人がみえてくる
内を照らす
深く哀しく
自分がみえてくる

灯が闇を照らす
温かく　やわらかく
はげしく　きびしく

幾千もの年月をへて
今も　これからも
人は灯とともに・・・

文・写真　羽部玲子

人形劇 がんばっています！

子どもたちの心に仏教を、また現代失われつつある心の教育を、子どもたちに伝わりやすい人形劇という活動で少しでも担っていきたいと、そんな願いをもちながら、ちからを注いでいる教区の活動を紹介します。

岐阜教区児童教化連盟の委員が、「人形劇やゲームを通して仏教に触れる場」という趣旨をもって、2003年より、スタッフをつのってたちあがりました。

自らで人形劇のストーリーを選択し、人形も試行錯誤しながら手作りし、実施へとつなげました。

当初は寺院での子ども会巡回からスタートし、今では子ども報恩講、花祭りなど各寺院での行事や、幼稚園・保育園などからの要請を受け、活動の基点としています。

スタッフたちはレパートリーをふやしていく事はもちろんのこと、人形の扱い方や、ストーリーのあり方、また子どもたちの心をつかんでいこうと、時にはアドリブや流行語も取り入れることによって、内容を充実させていこうと努力しています。

人形劇「三枚のおふだ」

編集後記

最近は、哀しい事件や事故が多いように感じます。

その原因は、色々とあると思うが、その中でもやはり身内同士で傷つけ合う事件が増えたことが、一番哀しいことだと思います。

なぜ、このような世の中になったのだろう。

中国の四川省で地震が起こりました。

その時に思った事ですが、人間というのは、一方ではメンツのためにいろんな事を取り繕う人達もいれば、他方では、瓦礫の下敷きになりながらも、何日も飲まず食わずで生き続ける人もいます。

同じ人間でも、環境や立場が違うと、醜くも美しくもなるんだと感じました。

一色　俊介

発　行　岐阜教区教化委員会
真宗大谷派岐阜教務所
磯野恵昭
〒500-8054
岐阜市大門町1
Tel.(058)266-1378
編　集　岐阜同朋編集委員会

この人に聞く

藤場（ふじば）　俊基（としき）

生涯をかけて顕らかにしなければならない、そういう課題をもって親鸞聖人が取り組まれた著作「教行信証（顕浄土真実教行証文類）」を、また同じように生涯をかけてでも明らかにしたいと願い取り組まれている藤場俊基先生。

今号では、私たちが教行信証を読むときの視点と立場について、竹市昭英さんからインタビューしてもらいました。

◆なぜ教行信証に化身土巻が書かれなければならなかったのか？

教行信証は、真実の教行証、つまり真実の仏道を顕らかにするために親鸞聖人ご自身の手で書かれた書物です。

でも私たちは言うまでもありませんが親鸞聖人であっても、真実は何かを説明することはできないのです。真実とはこのようなことだと教えることができるという前提には立てないのです。真実ではないものによって、逆に真実が顕らかになっていく。そういう形でしか、私たちと真実との関わりは成立しないと、そう私は考えています。

ならば、私たちが普段見たり聞いたり感じたりすることは何かといえば、皆「化」なんです。「化」とは「化ける」ということ。化身土の「化」は悪い意味でなく、真実が、私たちが見たり聞いたり感じたりすることができる形となって現れる、それが化です。その化なるものから、真実なるもののはたらきが聞かれてくる。そういうことを明らかにするのが化身土巻の役割であると思います。

私たちは、間違いを完全になくすことはできません。そこで人間がどのように過ちを犯すのか、そしてそれをどう正しく受け止められるのか、そのギリギリのところまで見定めようとしておられるところが化身土巻の重要性であると思います。

◆どうして親鸞聖人は無量寿経を真実の教えと信頼することができたのか？

教行信証の教巻は、真宗聖典でたった4ページしかありません。たったそれだけの確かめで、聖人はどうして「それ、真実の教を顕さば、すなわち『大無量寿経』これなり」とはっきり言い切れたのか。私たちが真実が何かと説明することができないように、親鸞聖人も同じく真実を説明することはできないはずなのです。同じ凡夫ですから。

教巻の確かめに親鸞聖人が引かれるのは、無量寿経の発起序、すなわち無量寿経の説法が始まる前の出来事だけです。それを根拠として親鸞聖人は真実の教を決めています。「説法の内容がすばらしかったからこの経は真実である」という決め方ではないのです。

また、無量寿経の結論を先に言ってしまうと、「ただ念仏すべし」ということに尽きてしまいます。普通の感覚の

藤場　俊基（ふじば　としき）
1954年石川県生まれ
早稲田大学政治経済部卒業後、5年間　三和銀行勤務
大谷専修学院終了、
大谷大学大学院博士課程（真宗学専攻）満期退学
現在、金沢教区常讃寺衆徒。
著書：『親鸞の教行信證を読み説く』（明石書店）
『凡夫、ゆきやすき道』（名古屋別院）
『親鸞の仏教と宗教弾圧』（明石書店）

人間にとっては、そのことが真実教の結論であるということは最も受け入れがたいことなのではありませんか？そのような結論の説法が説かれる経典に真実が顕らかにされていると、どうして言い切れるのか。教巻の課題はそこにあります。

なぜ親鸞聖人はこの経の説法において、間違いなく真実が顕らかにされていると見定めることができたのか。

それは、説法の内容に依ってではなく、「どういう者に対して説いたのか」ということがポイントになります。無量寿経でいえば阿難尊者ですが、この人に説く経なら、私も一緒に聞かせていただくことができるというところで決まっていくわけです。説法を受ける相手と自分が同一視され、聴くべき自分というものの位置が見えてくる。それ以外に私たちが仏法に出遇うということはありえないのです。私たちが生きている今の世に仏陀がいない以上、私たちのまわりには迷った人しかいない。そういう状況の中でどうして、迷いを深める教えと、それから覚める教えを見定めることができるのか、それが教巻の課題であるわけです。

◆なぜ、凡夫が仏の教えに出遇うことができるのか？

釈尊からすれば、「ただ念仏しなさい」という一言が真実の教えである、と素直に受けとめることができない凡夫を相手に説法されているわけです。本来凡夫は、たとえ真実が説かれていようと誠実に受け取ることができません。その凡夫がなぜ仏に出遇うことができるのか。それが法蔵菩薩のはたらきであるわけです。法蔵菩薩の本願が私たちの上にはたらくから、迷いの衆生が仏の教えに出遇うことができる。そういうはたらきを本願・他力・回向ということばが指し示しているとおさえられます。

そうなると、私たちはどこまでいっても、仏の言葉を誤解するものとしての立場を外さないように化身土巻を読まなければならない。誤解のあり方にはいくつかの形があります。誠実な誤解、不可避な誤解、人為的な誤解、悪意を持った誤解、それぞれ教えに対する関わり方の問題といったものが、化身土巻の課題の焦点になってくるわけです。

（２００７年10月20日談、
２００８年４月28日加筆訂正済）

※この対談の内容につきましては、拙著『親鸞の仏教と宗教弾圧』（明石書店、２００７年12月）をご参照いただければ幸いです。

（藤場）

インタビュアー
竹市 昭英 氏
1954年生まれ
20歳代より、教区教化委員として活動中
岐阜教区第4組　光澤寺　候補衆徒

●インターネットから見えてくるもの●

川村 妙慶
（真宗大谷派僧侶、アナウンサー）

私は今から13年前、友人の悩み相談を受けることになりました。毎日電話がかかってくる彼女に、仏教のお言葉を添えて私なりに伝えていました。すると「今の話、私だけが聞くのはもったいない。どうか仏教がわからない人にも伝えてほしい」と言われたのです。すると彼女は「ホームページを作り、仏教を伝えては？お寺に縁のない人でもこれだったら気軽に訪ねられるよ」と一つのアイディアを提案してくれました。また、偶然にも彼女はIT関係の仕事に携わっていたのです。

ある日、その友人からメールがきたのです。「あんたな！さっぱりわからんわ！本当に伝えようとする気があるの？自分だけわかった顔をして」と。きつい一言です。

自分が受け止めた真宗のお話を、自分だけがわかったことにしていて、目の前の人に伝えようとはしていなかったのです。当然、アクセス数もあがらない日々です。

その日から私は「どう伝えたらいいか」という課題が与えられました。まずは自分が体得した話から書き始めました。日々、感じた事、アナウンサー時代の失敗談、世の中のニュースに照らし出しながら身近な話題から書いていきました。するといろんな方がホームページをのぞいてくれるようになったのです。それが今でいう「ブログ」に発展するとは夢にも思いませんでした。

ある日「日替わり法話を読んでの感想はこちらへお願いします。」となにげなく私のメールアドレスを掲載した所、毎日のように悩みメールがくるようになりました。

「私は探偵の仕事をしています。毎日人を張り込む仕事です。依頼主にとっては喜ばれる仕事ですが、本人にとっては嫌がられる仕事です。いくら生活の為とはいえ、こんな仕事はいい仕事なのでしょうか。」

という内容のメールがきました。私は悪人正機の話を紹介しながら、身の自覚の大切さを伝えました。

またある人は「真宗の教えって、はっきりいってレベルが低いですよね。おまかせといいますが、何かに依存し、すがる教えですか？私は自分を強くしてくれる教えの方がしっくりきます」と。これはよく真宗の教えを誤解してしまう質問です。他力本願のお話をじっくり伝えることからはじめました。

またある方は「私は住職です。お寺は人が集まる所というのはわかっています。しかし私は疲れています。坊守だってこのまま逃げたいといっています。」という嘆きでした。どんな職業であろうとも人間です。疲れもくるし弱音を吐きたい時もあります。そこで人間関係って何でしょうね？という所からお伝えしています。

毎日のようにくるのは「死にたい」という悲痛な叫びです。死にたいといってもう5年間メールのやり取りをしている人がいます。「妙慶さん！まだ死んでいません」と今日もきます。死にたいというのは「本当は死にたくなんかない！でもこの苦しみをわかってほしい」という心の表れなのです。それが痛いほど伝わるようです。

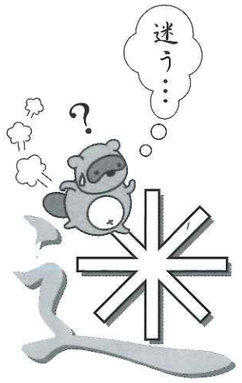
私の元には約8割くらいの方が匿名で悩みを寄せてこられます。ネットは悪いイメージもありますが、利点もあります。それは、身分を明かすことなく、自由な時間に悩みの内容だけ触れることができるのです。しかも相談料はタダ（笑）。今ではそれが一日200通を越えるほどにもなりました。しかし、「自らの名前を名乗れない匿名の悩みなんか聞くな！」とお叱りを受けたこともありました。

私はあらためて今、身近に話を聞いてくれる人がいなくなったのだなと感じているのです。ただ悩みの解決を求めているのではなく、「心の叫びを聞いてほしい」だけなのです。13年間続けてきてそのことがはっきりと確かめられた気がします。

ある心療内科のドクターから「なぜこんなに患者が多くなったかというと、お寺が話を聞かなくなったからですよ」と厳しいメールもいただきました。

よい人間関係をつくるための、一番簡単で、一番難しいこと。

今、仏教離れという深刻な問題を抱えているようですが、私は逆だと思っています。むしろ今、仏教に関心を持っている人が増えています。しかし、どこの門を叩いていいのかわからないのです。新興宗教に走る前に相談を寄せる若者が増えています。私の目的は私のホームページをのぞいてくれ、アクセス数を増やすことではないのです。私のホームページはあくまでもきっかけであって、近くの真宗寺院にご縁を持ってほしいと訴えています。



人間というものは少しでも「私は知識人だ！お前とは違うのだ」というものを見せると距離がでてきてしまいます。むしろ「お互い同じなのだ」というものが見えた時、親しみを感じていくのです。それが段差のない平座という場ではないでしょうか。

私たちは、悩みがあるからそれがきっかけとなり、自分の人生について考えることができるのです。

私は、悩みを解決することはできません。むしろ悩みをきっかけとして、そこから自分を生きるということに気がつけることが大切なのでしょう。だってこの私が悩み多くかかえる人間だからです。むしろ、皆さんの悩みからすくわれているのは私かもしれません。（笑）

今ではネット上で「声の法話」「ラジオ法話」も合わせ、身近な話から真宗が伝えられたらと思っています。

「今日はどんな方が訪ねてこられるのだろう」と思いながら、キーボードをたたいている日々です。

川村 妙慶（かわむらみょうけい）
1964年 北九州市の西蓮寺に生まれる
池坊短期大学、大谷専修学院を卒業
2000年 日替わり法話のホームページを開設
2005年 ブログ開始
2006年 結婚、京都正念寺の坊守でもある
現在、京都KBSラジオで「妙慶のロココなひと時」のパーソナリティーを務める

●著書
「心の荷物をおろす１０８の智慧」講談社
「絵解き 世界一ホッとする尼さんのいい話」マガジンハウス社
「恋愛駆け込み寺」！主婦と生活社
「続・世界一ホッとする尼さんのいい話」CD法話 マガジンハウス社
「妙慶さんの小さな親切～心の相談～」河出書房

（※このコーナーのイラスト：「絵解き 世界一ホッとする尼さんのいい話」より）

門徒の系譜

河野門徒

この美濃地方にどのように真宗の教えが広まっていったのか。
歴史を紐解くと門徒の息吹が聞こえてきます。
今号は木曽川中流域　河野門徒を紹介します。

岐阜教区第1・3組
名古屋教区第5組
竹鼻別院

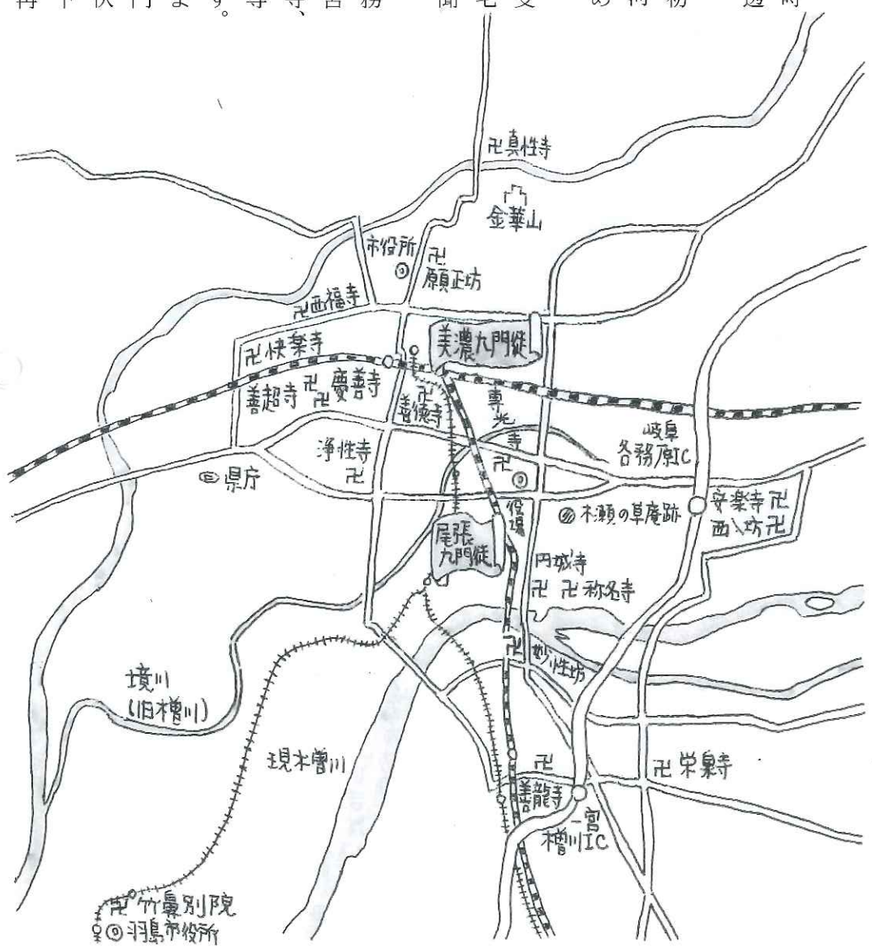
源平の争乱以後、平安の都に求心力が失われ、新しい時代を自ら見定めようとしていた地方の武士、農民に浸透したのは鎌倉新仏教でした。

私たちの真宗がこの地方にもたらされたのは、鎌倉初期、一二三五年。親鸞聖人が関東から帰洛される折、三河国矢作(愛知県岡崎市)柳堂にしばらく逗留し教えを広められたときと伝えられています。

これをはるばる訪ね、その教えを聴いて大変感銘を受けた尾張国葉栗郡近郷の九人が、葉栗郡木瀬(岐南町三宅辺りという)に草庵を建て、聖人を招いてその教えを聴聞したといわれています。

この九人の門弟を祖とするのが、竹鼻別院専福寺、各務原市下中屋の河野西入坊、小佐野の安楽寺(本願寺派)、一宮市北方の河野妙性坊、大毛の河野榮泉寺、黒田の善龍寺、笠松町円城寺の河野圓城寺、河野稱名寺、岐南町八剣の専光寺(本願寺派)の九ケ寺で尾張九門徒と呼ばれています。

時は下り、木瀬の草庵は川の氾濫のため流亡していましたが、東国布教の折そこに立寄った蓮如上人は河野門徒に草庵の復興を依頼されました。一四七〇年、岐南町伏屋に復興した河野惣道場に親鸞聖人の御影、御絵伝が下付され、ここに本願寺直参としての河野門徒の歴史が再スタートするのです。



蓮如上人の言行録「第八祖御物語空善聞書」に

「仰に、『信をしかととりたるひとすくなし』、その時南殿の御えん(縁)へをわり(尾張)の巧念まいられけるを、やかて仰に、『あの巧念なんとこそよくよくすえの人なれとも、信をとり河野九門徒をもとりたてなんとしけれは、すえすえのものなれとも信心のあるによて座敷をもあけたり、よくよく御こころえあれ、と北殿へ仰られけり』

とあり、河野門徒が「末々のものなれども」蓮如上人の信頼を得たことが記されています。

戦国の世を横目に、尾張九門徒は下道場も続々とでき、一五三六年頃までには美濃九門徒を加え、十八門徒により惣道場の維持がなされるようになります。美濃九門徒とは、茜部の浄性寺、願正坊(後に岐阜へ移転)、鶉の西応寺(後に他国へ退転)、六条の慶善寺・善超寺、本庄の西福寺、快楽寺、長良の真性寺(出自が河野村)の九ケ寺で、願正坊と真性寺が大谷派、あとは本願寺派です。

中心となる河野惣道場が、水難や戦乱の結果、正木、円城寺、領下、新加納を経て、現在の竹鼻別院となったこと、また一五八六年の木曽川洪水による河道の変道により従来尾張九門徒といっていたものが美濃と尾張に分断されたこと、そして東西分派の影響もあって、「河野門徒」の実像は大変掴みにくくなっています。けれども、戦国の世に、「河野門徒」の名の下、民衆が集い、下道場が次々とできていったその歴史の上に私たちが生きていることは間違いありません。

河野西入坊さんの「蓮如さま」にお参りしてきました

「第八祖御物語空善聞書」に登場する尾張の巧念のお寺、河野西入坊さんでは、蓮如上人からいただいたご恩を忘れることなく、毎春「蓮如さま」の法要を勤めておられます。

現在は4月の最終土・日曜日に行われていますが、少し前まで「蓮如さま」の日は学校が休みとなり、縁日をみんなが楽しみにしていたという程、地域に溶け込んだ行事です。

春の麗らかな日差しの下、本堂の屋根瓦の葺替えを終えられ喜びで一杯の法要でした。

お店が並びます　さあ何を買う？

蓮如さまの寿影(生前に描かれた絵像)

お参りの様子